

衛生看護科の学級経営と教科指導

——— 2年間の実践を通して ———

衛生看護科 時崎智子 竹中暁美

I はじめに

看護教育は、基礎看護をはじめ、校内で学んだ知識や技術を校外実習で行い、看護学生としての態度を身につけ、看護を実践できるようになるための基礎教育である。特に看護臨地実習は、看護科教員全員がチームティーチングの指導形式で取り組み、生徒が看護者として自分自身と向き合い、最も成長できる機会である。また、各学級担任を中心に日常生活を含めた人間形成のための指導が必要な学科でもある。

そこで、2年間衛生看護科として、学級担任として「看護とは」を生徒たちに問いかけながら、教科指導を行った経過を整理したので報告する。

II 対象生徒

奄美高校衛生看護科平成28年度入学生26名

男子6名 女子20名（過年度の生徒1名）

III 指導期間

平成29年4月～平成31年3月

IV 学級の状況（平成29年4月）

全員看護師を目指し、与えられた課題や試験をこなすことはできているが、自ら目標を定め、学習に取り組んでいる生徒は少ない。また、課題や提出物の期日が守れない生徒も数名いる。一方、部活動には積極的に参加し、中心的役割を担い、高校生活を充実させている生徒は多い。元気があり、自己主張をする生徒が多く、人間関係が複雑でクラスマッチや体育祭などはクラスとしての結束力はあまりみられない。しかし、目標が定まり、具体的に根拠や方法を示すと理解ができ、意欲的に行動する力につながる、限りない可能性が期待できる。

V 指導方法と生徒の変容

1 学級経営

1) 学年の目標

2年次 ①生徒が自分の日常生活を振り返り、高校生として自立した生活が整えられる。

②戴帽式、看護臨地実習の目標を伝え、生徒が意欲的に取り組み達成感を得、看護に関する関心が高まる。

③体育祭やクラスマッチなど学校行事を通して、クラスとしての仲間意識を高め、お互いを理解し協力ができる。

3年次 ①看護臨地実習、進路決定、准看護師試験受験に向けての目標や具体的な計画を提示することで生徒自身が意欲的に取り組める。

②学校行事や学習を通してお互い協力し合い、生徒それぞれの目標に向かって自ら考え行動できる。

2) 具体策

- ①SHR, LHR で日々、週、月、学期、年度の目標や計画を明確化する。
- ②清掃時などを活用し、自分の担当や役割だけでなく他者への配慮や気遣いができるよう指導する。
- ③学級活動時、目標の具体化、グループ編成の工夫等、意欲や関心をもって主体的に行動できる指導をする。
- ④各科目のレディネスを整え「生徒ができること、できないこと」を明確にして段階に応じた具体的指導をする。

3) 実施時期と短期目標及び実践内容の提示

表1 平成29年度2年生

月	目 標	実際に行ったこと
4月	目標を共有しクラス全体が目標を達成しようとする意識をもつことができる。 担任の指導方針を保護者に理解していただき、協力の依頼と生徒の特徴を把握することで、日々の生活や教科指導を遂行できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・SHR, LHR で目標の提示。各自記録する ・3年生に向け、今後どのように過ごすことが必要か、看護師としての責任に対する意識づけ ・戴帽式、看護臨地実習に向けて協力し、全員参加できるように課題や準備について具体的に伝える ・家庭訪問 保護者に指導目標の提示と協力の依頼 ・清掃の徹底、担当者との連絡 ・提出物の徹底、特に教科担任との連絡 実習に向けての課題、レポートの準備 提出状況と内容の確認指導
5月	人間形成構築	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲への配慮と生徒の学習状況を把握する ・教育相談（副担任と分担） ・中間考査 目標点数や計画表の作成と記録 取り組み状況及び考査結果を基に理解度の確認
7月	生活を整え、計画的に学習ができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・期末考査 目標点数や計画表の作成と記録 ・体育委員を中心にしたクラスマッチの選手選出を見守る ・クラスマッチの応援
8月		<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導（校内）現状報告 ・夏休みの課題提示と日課表の作成 課題の計画表配布及び各自の具体的計画表作成
8月末	看護臨地実習に対する生徒の責任を理解させる。臨地実習に向けての課題やレポートを計画的に取り組みさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の確認と放課後事後指導及び保護者との連絡 課題や提出状況を表にして目に見える形にする
9月	看護臨地実習（老人ホーム）バイタルサイン測定を実施し、看護者としての意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・技術の修得確認とレポートや課題の確認 ・学習内容の精選と活用方法の説明 ・課題やレポートを実際に活用する ・振り返りのまとめ

10月	看護臨地実習（病院）の目標を明確にし、計画（行動）を具体化する。 戴帽式参加の条件の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・戴帽式，看護臨地実習への取り組み状況の確認 ・学習不足生徒への指導と保護者との連絡 ・技術（バイタルサイン測定）の修得確認試験に合格し学習を終了した者のみ参加できることを再確認する。 ・教科会での確認と管理職への報告 ・保護者への事前連絡と協力の依頼 ・技術，学習の最終確認 ・課題の未終了者及び不合格者への対応について教科会で確認 ・管理職への報告，保護者への連絡 ・各実習施設への周知と協力依頼及び学校の対応について報告して実習参加 ・実習要項をもとに，内容，行動を具体的に示す。実習施設に生徒の現状を具体的に伝え，指導者に対応の方法を依頼する。双方の対応にずれが生じないよう教科会で引率教員が共有する。 ・問題点を予測して対応できるように準備しておく。 ・反省のまとめとアンケート ・平成30年の目標設定（生徒） ・教科指導の中で，各教科と3年生の臨地実習への関連性を説明する。 ・成績評定について（定期考査・提出物・出席など）説明 ・春休みの課題の提示と計画及び提出日の確認 ・2年生の反省と3年生の目標を立てる。
11月	戴帽式 看護臨地実習（病院）	
12月		
1月～3月	実習の振り返りと課題の明確化 平成30年の目標を設定し，生徒自身が自分のやるべきことを明確にして行動できる。	

表2 平成30年度3年生

月	目 標	実際に行ったこと
4月	目標の明確化と具体的計画を提示し，全員が今何をすべきかがわかり，各自が意識して行動できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・目標と具体的行動計画を各生徒自身が立てる。
5月	看護臨地実習	<ul style="list-style-type: none"> 看護臨地実習 進路決定 卒業・准看護師試験合格
8月	進路決定	<ul style="list-style-type: none"> ・看護臨地実習に対する意識づけする。 ・三者面談による今後の計画と協力依頼 ・各施設との調整 ・三者面談で今後の計画と協力依頼 ・夏休みの計画と手続等について再度説明
1月迄		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体で行動することを意識づけする。

11月	准看護師試験対策	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬試験（校外）8月，11月，1月
12月	生活リズムを整える	<ul style="list-style-type: none"> ・日課表の作成（参考資料） 課題の計画作成
1月	試験が近づいてくると不安やイライラが生じやすくなることを理解し，クラス全体で協力し，自ら目標を達成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・①模擬試験結果や取り組みの状況の確認や人間関係によるストレスを最小にするためのグループ編成 ②グループメンバーが協力しあう時間と個別学習ができるように放課後の時間設定や休日の教室解放 ③補習期間中は体育科の教科担任に依頼し，週2回程度体育を組み入れる ①②の状況，学習の進捗や取り組み，理解度など面接及び個別指導を行い，自信がある生徒が主体的に他の生徒に教える環境づくり <p>個々におこる精神的な不安や焦りなどを観察して，予測されることをできるだけ最小にできるように心がけ個々の状況に対応。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人的対応（教師：関係者全て・生徒・保護者），資料，時間等
2月		

2 教科指導の概要

1)教科目標

看護に関する各科目において修得した知識と技術を臨床の場で，活用し実践する経験を通して，看護観をはぐくみ，問題解決の能力を養うとともに，チーム医療に携わる様々な職種の役割及び保健医療福祉との連携・協働について理解し，臨床看護を行うための必要な能力と態度を育てる。

2)基礎看護及び看護臨地実習

表3 時期と基礎看護と看護臨地実習の進捗

		基礎看護		看護臨地実習
		単元	小単元	
1年次	1学期	看護概論 (通年)	看護とは コミュニケーションなど 環境の調整 姿勢 移動と体位変換	①老人ホーム実習 5日間
	2学期		日常生活の 援助	

	期			
	3 学 期		観察・報告・記録 バイタルサイン測定	
2年次	1 学 期	診療の援助	安全 無菌操作 与薬	
	2 学 期		罨法 検査 吸引吸入	③老人ホーム実習 5日間 ④病院実習
	3 学 期	基本技術	包帯法 看護過程	
3年次	1 学 期	/		⑤病院実習 保育所実習

表4 看護臨地実習の目標（該当クラスに対する内容）

内容	実習目標	各期の現状
1年次 老人ホーム 5日間 基礎	①看護臨地実習における態度を身につける。 生徒が自分から指導者に声をかけることができる。 ②コミュニケーションの実際を体験する。 （高齢者、指導者他） ③既習単元の実際を知る。 ④自分の課題を見つける。	初めての实習である。 生徒の不安と緊張がある。 既習内容が少ない。 人と関わる機会が少なく、自ら声をかけることが少ない。 リーダー的役割の経験者が少ない。
1年次 老人ホーム 15日間 基礎	①1年次5日間の老人ホームで身につけた態度が実際にできる。 ②高齢者の社会背景や生活を観察して、コミュニケーションができる。 ③自己の学習目標に対して、指導者に伝え実施できるように自分で調整できる力が身につけられる。	2回目の実習 既習内容が前回より増える。 長期である。
2年次 老人ホーム 5日間 老年	①老年期にある対象に合わせたバイタルサイン測定ができる。同時にコミュニケーションをはかることができる。 ②老年期にある対象を理解し、様々な状況にある高齢者の日常生活を観察できる。 ③実習の行動を自分で考えて行動できる。 （態度）	3回目の実習 日常生活における学習内容はすべて既習済 バイタルサイン測定を初めて生徒・教員以外で測定する。 病院実習を控えている。

2 年次 病院 実習 4 週間 精神	①精神に障害がある患者と対象が安定した状態にあるように、相手の思いを考えながらコミュニケーションができる。	健康障害のある患者に対して、初めて関わる実習である。 コミュニケーション・バイタルサイン測定は既習している。バイタルサイン測定や対象者の思いを考えながらコミュニケーションができるか不安が強い。 看護の視点で観察する。
	②精神に障害がある患者のバイタルサイン測定ができる。 ③精神に障害がある患者が生活している現状を知る	
成人	①様々な障害を持つ対象者に合わせてバイタルサイン測定や疾患にあった観察ができる。そのためのコミュニケーションができる。 ②対象を理解するための方法を知る。 ③自分の課題を見つける。	看護に必要な情報を得るための方法を知る。
	3 年次 病院 実習 8 週間 成人	①様々な障害を持つ対象に合わせてバイタルサイン測定や疾患にあった観察ができる。そのためのコミュニケーションができる。 ②安全であること。
母性	①外来：妊婦健診や産科健診で行われる処置や検査に参加見学を通して、実施する目的や根拠を知る。 ②病棟：産前産後の管理、新生児期に実施する処置や検査の目的や根拠を知る。	女性の出産における正常な経過を理解することが難しい分野でイメージしにくい。分娩や出産期に行なわれる処置なども同様である。
	保育所	①子どもと遊ぶことで、年齢による発達の違いや個々による発達の違いを知る。 ②発達に応じた援助の必要性や保育士の思いを知る。

本校衛生看護科は「保健師助産師看護師法」による准看護師養成所の指定を受けており、看護臨地実習は必ず履修修得しなければ、進級及び卒業はできない。単に単位修得のためにペーパー試験を中心とした指導だけでなく、ひとりひとり個性があり、学び方もそれぞれである。そして、多くの生徒は、看護師を希望し進学する。そのため、教科目標である「看護観」を育てる必要がある。

したがって、各実習終了後の生徒に期待することを考え、指導者も自分の「看護観」「指導観」を持ち、発達段階や修得状況に応じて丁寧に指導することが必要であると考えます。

3)看護臨地実習指導の実際

看護臨地実習のオリエンテーションを実施するにあたり、留意したことは次の5項目である。

- ①実習の目標は何かを明確にする。
- ②目標を達成するために何をどのように学ばせるか、指導の方法を考える。
- ③実習前、実習中、実習後に準備すること。

④生徒の特徴を考え学習効果が得られるグループ編成

⑤看護科会で指導上の共通理解や配慮することの確認事項

①～③は教科として明確にしておくべき内容である。(実習要項) ④⑤は毎年毎回学ぶ段階や学び方によって多少の差はあるが、メンバーを考慮し、指導上の配慮をすることで学習効果が高まる生徒も少なくない。

目標設定や実施する内容は生徒の学習状況を考え、教員が計画し生徒に指示する。特に初めて体験することは説明しただけでは理解できないことが多いので、2年次以降の実習では、1年生の時の実習体験を想起させながらオリエンテーションを行うことが大切である。分からない時や不確かなときは、資料(実習要項やオリエンテーション資料)を確認しながら、繰り返し説明をして確認することを習慣化する必要がある。生徒が実施・見学したことや教員が指導したことは必ず記録を見て事実を確認する。生徒は理解していなかったり間違っていたりするので、実習指導者や担当看護師に確認して、生徒とやり取りをすることで正しく理解でき、報告や記録・確認が大切なことを実感させる指導につながる。特に精神に障害がある患者は、時間・日内変動が大きく予測できない状況にあること、また不安定な状態にある患者もいるので、患者と関わる時は必ず看護師・指導者と実施することを意識させなければならない。

4) 指導の事例

①衛生看護科2年男子生徒(生徒A)

提出物やレポートの未提出、約束事が守れない。健康障害をもつ患者のバイタルサイン測定では、測定値の誤りや曖昧な対応など実習に行く前の技術が基準に到達していなかったため、連日放課後指導や休日指導を行い臨地実習に参加することができた。実習中も放課後指導を継続して不足している部分を補い、ようやく患者の検温を実施できる段階になった。

実習4日目 検温実施初日

生徒に指示したこと	引率教員と共有したこと
実習指導者に初めて検温を実施し報告をすることを実習指導者に伝え、必ず確認していただくよう指示する 実習指導者に報告する前に引率教員に報告して、確認後指導看護師に報告するよう指導する	間接的でもよいので、必ず検温の状況を実際に見て欲しいこと、 検温終了後、まず引率教員に報告をするよう指示しているため確認をして欲しいこと 状況によっては実習指導者にも伝えること

この場面では、生徒は測定していない呼吸の項目を引率教員に報告したので、引率教員が本当に実施したのかを問いかけ確認したところ「実施していない」と正直に答えた。その後、実習指導者に報告し生徒の状況を理解していただいた。生徒Aに「実習生は事実を報告すること」「できない時には正直にできなかったことを報告する」ことを指導した。さらに、放課後引率教員が日誌指導の中で、実習中に指導したことの重要性と行動の振り返りの指導をした。

②衛生看護科3年女子生徒(生徒B)

日頃から口数が少なく、教師の質問にも必要なことしか口にしないが、友人とは楽しく会話し、影響力のある生徒である。実習中の基本的な態度や知識技術はある程度身につけている。2クール目に同級生が受け持ち、患者の苦痛を取り除けたので、教師は2クール目の生徒が何をしてきたか

は伝えず、生徒B自身が患者と関わり、必要なことを自分で見つけるように指導した。

患者紹介：60代男性 脊椎の手術を他の病院で行い、術後リハビリテーションのために入院
 リハビリテーションや体位交換の時は、特に四肢のしびれと痛みが強い。先週受け持った生徒が「マッサージをすると痛みが和らぐ」と申し送りをしたので、日常生活の援助に参加し、コミュニケーションをはかりながら継続してマッサージを行い、リハビリテーションは計画的に行われて落ち着いた状態にある。

指導の場面：患者の上肢をマッサージしている生徒に、部屋担当の看護師が「マッサージをしているだけではなく、他に何かないか考えるように」アドバイスを受けている場面に居合わせた教員はそのことを生徒がどのように受け止め何を感じたか気になった。

プロセスレコード：看護の場面は看護師と患者の1対1の対応である。そこでその場面にいない人も状況が描けるように再構成したものである。

生徒の言動	患者の言動	教師の思い	教師の言動
①受け持ち患者の横に座り、腕のマッサージをしている	穏やかな表情でベッド上に臥床している	②患者のそばにいて、生徒Bも優しく声をかけている。 患者の表情は穏やかで、良かった。担当看護師は同室で他の患者の検温中だな、大丈夫、また後で様子を観に来よう	③部屋の入り口から生徒の様子を覗う。
④担当看護師は検温が終わり退室するとき、「マッサージをしているだけではなく、他に何かないか考えるように」	穏やかな表情でマッサージを受けている	⑤えっ、この患者に今マッサージしていることを注意されたのかな？この患者にとって看護だと思うけど・・・業務に追われると患者のそばに長くいられないことは分かるけど・・・生徒は自分が注意されたと思うのではないかな？今のマッサージを続けてよいことを伝えよう。	⑥患者さん気持ちよさそうだね。 患者に「ご迷惑かけていませんか？マッサージは上手ですか？」と生徒と患者の反応を見る
⑦患者を見る	「とっても気持ち良いです。上手ですよ、助かります。」笑顔でうなづく	⑧良かった。以前は痛い痛いと言っていたけど、笑顔で穏やか。 後で状況を話そう	⑨「患者さんが疲れないように様子を見て休んでいただいね。」 「〇〇さんきついときや休みたいときは遠慮

⑩はいと笑顔	患者「ありがとうございます」笑顔	看護師さんにもどうい うことか確認しよう。	なく席を外してと言っ てくださいね、失礼し ます」。退室する
--------	------------------	--------------------------	--------------------------------------

担当看護師が退室後、引率教員は次のことを確認した。看護師は、「看護師になったら患者のところに居たくてもいられないこととマッサージ以外に患者にすることはないか考えて欲しい」という思いがあった。そこで、引率教員は生徒に、マッサージの目的（苦痛を軽減する）とその目的を解決するために他の方法はないか考えるように生徒に指導することを看護師に伝えた。また、高校生は患者のそばにいられることが大事であり、患者の気持ちを知る機会にもなることも重ねて伝えた。看護師は「分かりました、そうですね、よろしく願います」との返事の後、生徒はその後も患者のそばに寄り添い実習を終了することができた。

放課後の記録指導で、生徒に指導したことは①生徒が看護師から言われた時、どのように思ったか。②マッサージの目的を確認し「患者にとって看護になっているか」③患者の気持ちと体の状態を考えているか④看護師はマッサージ以外に何かないか考えて欲しいという意図を伝えた。そして、生徒が行っているマッサージは看護であることを生徒に伝え、安心して患者にかかわることができるように指導した。

5) 考察

衛生看護科2年男子生徒（生徒A）は、学校生活や看護臨地実習に至る指導経過の中で知識・技術・態度が基準に到達していなかったことを初めて患者に実施するので、安全安楽にできるか確認が必要だと担任は認識した。そこでほかの指導者（引率教員）に生徒のレディネスを伝えて、安全を確認し不足していたことを指導した。

バイタルサイン測定を行い患者から得る情報の意味や生徒Aが実施した内容を看護者の行動として考えさせ、「目標となる看護師は？」と問うと「今ある自分」ではないとも答えた。生徒Aが自分の行動を振り返り、患者に対する思いを変化させていくことで、解決策を自分で見出し、行動できる指導につながるかと考える。しかし、このようなことを繰り返す生徒は実習指導者に協力を依頼し、実習に取り組むためには、指導者と教員が共有し、指導していくことが必要である。このことから次のことが得られた。

- ①患者が安全であること。
- ②実践力とコミュニケーション力がないことから予測ができたこと。
- ③担任教員が引率教員にレディネスと具体的な指導の方法を伝え、連携したこと。
- ④生徒が初めて実施することは引率教員に報告後、指導看護師にも報告するよう個別に説明したこと。
- ⑤引率教員が実際にみた事実をもとに指導したこと。
- ⑥実習日誌の中で振り返り、記録にすること。

このような事例の場合、看護は「患者の安全を守ること」であり、「准看護師試験の受験資格を認める学科」であるため実習ができる

かどうかを判断する責任があることを生徒・保護者に理解していただく必要もある。

図1のように看護師は、自分の頭の中に対象となる「患者のより良い状態」を描き、患者と関わる
ことが重要である。

衛生看護科3年女子生徒（生徒B）の実習の場面での引率教員は、看護師の指導は高校生にはレベルが高い目標であると察した。一般的に看護学生は看護師や患者の「言葉」「行動」の現象をそのまま受け取り判断する。しかし、看護では、「患者の言動には必ず認識がある」ことを忘れてはいけない。薄井氏のいう図1「看護は過程である」から考えると、「マッサージをしているだけでなく、他に何かないか考えるように」と

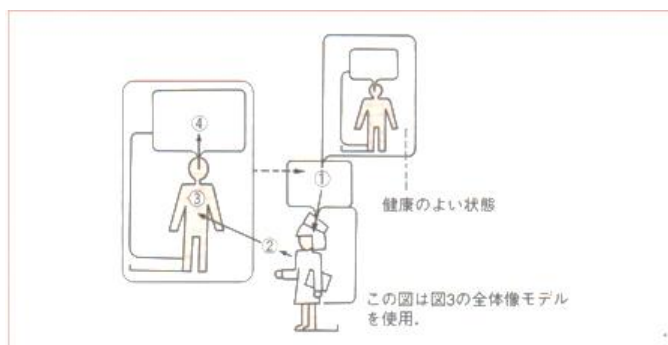


図1 看護は過程である 「科学的看護論」から引用

いう看護師の言葉は①マッサージばかりしている。②長く患者のそばにいただけが看護ではない。ともとらえられる。一方患者の状況は、①手術を受けて、しびれや痛みがある。②自分一人で動けない。身の回りのことは他者に委ねなければならない。③社会の一員として働いてきた。④生徒がいてマッサージや話をすることで穏やかな表情になることもある。何をしても辛いときはある。などが考えられる。

『この患者の看護は？』を安全・安楽・自立の視点から考えると、急性期の時期は過ぎ、リハビリテーションの段階で援助をもらいながら退院し自立を目指す時期にある。しかし、患者はベッド上で自由に動けず、動くとき痛みが生じるので、安楽であるためには、マッサージや保温、訴えをきくことは、苦痛を取り除き、高校生の段階の実習としては看護につながる行為である。生徒のレディネスをもとに教師が看護であることを生徒に伝え、担当看護師と調整することにより安心して実習が終了できたと思われる。

図2のように看護学生が臨地実習する場合は、必ず患者の状態を把握した指導者が指導する必要がある。しかし、私たち高校の教員は患者を把握するまでに至らないので、臨床の実習指導者と連絡を密にして、協力し合うことが必要となる。この生徒の例のように、いかに細かなことであっても、指導者である看護師と教員が共通理解して統一した指導をしていくことが望ましい。



【図8】臨地実習の学習過程

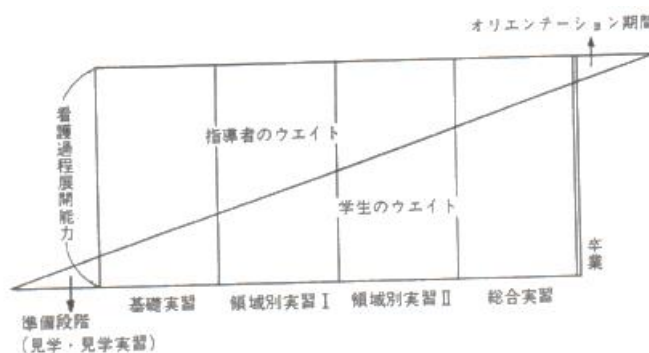
図2 「Module方式による看護方法実習書」

〈改訂版〉現代社から引用

また、生徒は看護を学んでいる過程であり、どう学ばせるかを教員がしっかりと「指導観」をもっていることも大切である。

図3で例えると高校3年生は基礎実習の段階にあると考える。

したがって、基本的な技術であるコミュニケーションや観察、修得した技術を体験しただけで、看護過程展開能力（思考する力）が、ほとんど身につけていないと考え



【図9】看護過程展開能力の修得過程

図3 Module方式による看護方法実習書〈改訂版〉現代社から引用

て指導することが必要であり、生徒の取り組みが、患者にとって看護につながったかどうかを評価していかなければならない。実習することによって喜びを感じ、人間対人間の関わりから「看護っていいな」と思い充実感を得られるとともに、未熟な看護者たちは学びたいと思う気持ちを持って、進学や次の目標である准看護師試験への取り組み、そして進学した時に学ぶ意欲につながって欲しいと願って指導に取り組んできた。

VI まとめ

「准看護師・看護師」を目指す高校生を看護者として教育していくということは、白いキャンパスに色を付けていく最初の筆と同じようなことで、「責任のある仕事」であり「やりがいのある仕事」だと思う。

この実践から4つのことが得られた。

- ①どのような看護師を育てたいかという目標を教員間で共有すること。
- ②高校生の発達段階を踏まえ自分の目標が定まらないこともあり、生徒の気持ちを支えること。
- ③実際患者や指導者と関わり、校内実習では得られない楽しさを相互の関係性の中から看護を実感する機会を持たせること。
- ④指導する時は、生徒のレディネス（これができるよ）にそって、何をすべきかを丁寧に伝える。特に1年生には行動を具体的に「言葉」で伝え、見せたり、ヒントを与えたりすること。

学級経営と教科指導は重なる部分もあるが、看護師に必要な知識・技術・態度とはなにかを具体的に示しながら、担任として日々の学級経営の中で「どんな看護師になりたいか」を問いかけ、自分の目標とする看護師像を3年間で少しずつ具体的にイメージできるように作り上げられるようになることが望ましいと考える。そして常に生徒の言動と認識を確認しながら、生徒自身が実施すること、教員が実施すること、家族にも協力を求めなければならないことなどを明確にしていく。また発達段階を意識し、生徒自身が判断し行動しなければならないので、不足部分を生徒に問いかけ、保護者に相談し協力を得ながらの調整が、さらには生徒自身の意欲を高めていくことにつながると思われる。幸いにも、この2年間で少しずつではあるが生徒たち自ら学ぼうとする姿勢がみられるようになり、「看護師になる」という意識が高まってきたことは励みでもあり、楽しさにもつながった。最後の准看護師試験に向けて生徒たちは、お互い励まし合い協力して取り組むことができた。

VII 今後の課題

今回、高校衛生看護科の担任として、私自身の考える学級経営と教科指導を行ってきた。どんな看護師になってほしいかを意識しながら、進学する専門学校でさらに積み重ねていくために知識だけでなく、看護師としての思考力や人間形成につながるようにも指導してきた。経験や体験だけでなく、チームティーチングの指導形式の多い教科であり、統一した指導をするためには衛生看護科に携わる教員がお互い情報・指導方法を共有しあうこと等、やたゆまない努力が必要とされると考える。時代の流れの中で、社会に通用する看護師育成のために、実習病院や学習できる様々な機会を大切に、看護師及び看護教員としての基本的な「ものさし」をもってゆるぎない指導をしていくことが重要であると感じている。

参考文献 薄井坦子著 科学的看護論第3版 日本看護協会出版社
新看護学 2019 版 基礎看護 1 医学書院
新看護学 2019 版 基礎看護 7 医学書院
薄井坦子監修 Module 方式による看護方法実習書〈改訂版〉現代社
看護教育 2017 10 月号 阿部幸恵他 特集「実践思考力を育む」 医学書院

引用文献 科学的看護論 現代社
Module 方式による看護方法実習書〈改訂版〉現代社

以下はクラス経営の中で使用した一部である。

計画表

- ①生活リズムを整えるために
平日・休日の一日を計画する。
- ②短期目標を掲げる
- ③一日の反省と一週間ごとの反省をもとに次の週の計画目標を記録する。
- ④提出は強制ではないが、
教室に保管しておく。

定期考査用学習計画

- ①教科をすべて印刷する
- ②実施する日時を計画する。
- ③各教科の目標設定を記録する。
(LHR活用)

私の一日

進研模試の反省

今週の目標

日	曜日	天気	就寝時間	起床時間	学習時間
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					

科目	計画日	実施日	反省	目標

計画表

3学年卒業考査 学習計画

2018/01/11

番 氏名

科目	1月19日 土	1月20日 日	1月21日 月	1月22日 火	1月23日 水	1月24日 木	1月25日 金	1月26日 土	1月27日 日	1月28日 月	1月29日 火	目標点数
現代文												
世界史												
数 学												
生物基礎												
英語												
成人												
小児												
母性												
生活												
看護												

定期考査用学習計画

課題の計画と反省

- ①長期休みの課題の計画を立てる。
- ②視覚化すると終わった課題や残っている課題が明確である。
(LHRで計画を記録)

	予定	実際	反省	予定	実際	反省
18	金					
19	土					
20	日					
21	月			8/14	月	
22	火			8/15	火	
23	水			8/16	水	
24	木			8/17	木	
25	金			8/18	金	
26	土			8/19	土	
27	日			8/20	日	
28	月			8/21	月	
29	火			8/22	火	
30	水			8/23	水	
31	木			8/24	木	
1	金			8/25	金	
2	土			8/26	土	
3	日			8/27	日	

課題の計画と反省

衛生看護科 1 年生基礎看護

対象がいないベッドメイキングの指導と対象がいる寝衣交換の指導について

1 基礎看護 環境の調整（ベッドメイキング）対象がいない。

指導の方法	具体的内容
完成したベッドを提示	単元の目標と計画表の提示
本時作成する段階のベッドを提示	本時の目標
教員が技術を確認しながら実施	技術修得のために指導（T. T）
放課後指導	コツを教える
実技試験	技術の修得状況の確認

単元の目標や本時の目標を視覚化することで、実習内容や目標が明確になる。

技術習得の段階で正確な手順や方法を指導することで基本が身につく。

生徒が自己流ではなく、練習の必要性がわかり、工夫がする必要があることを知る。

2 基礎看護 衣服の援助（寝衣交換）：対象がいる。

指導の方法	具体的内容
一般的な衣服を考える	一般性と特殊性がわかる
患者にとっての病衣	対象（人）に技術を提供することを学ぶ。
病院・患者・生徒の技術の必要性	技術の方法を習得するために指導（T. T）
振り返りと課題の明確化	記録の提出

一般的な衣服と病衣から『患者とは』を考える。

寝衣交換と患者（対象）を考え、協力を得、思いを知る機会となる。

1 年生の基礎看護は、実体にはたらきかける技術がほとんどである。しかし、「この時の患者さんはどんな気持ちだろうね。」などと問いかけることが、患者の立場を理解して、学習を積み重ねることで、認識に働きかける技術につながっていく。

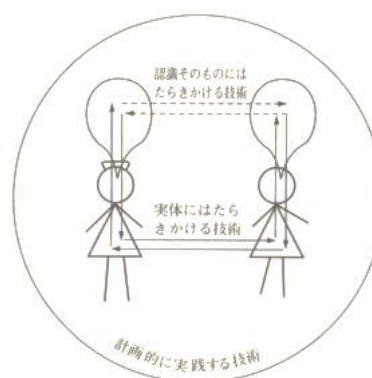


図 6 看護技術の質的分類

図 4 科学的看護論から引用